

河内国 若江郡 稲田村について

樋口豊治*・藪 康作**・緒方惟幸***

Inada, Wakae County of Kawachi no Kuni

Toyoji HIGUCHI*, Kosaku YABU**
and Koreyuki OGATA***

ABSTRACT

Until the middle of the nineteenth century, Japan was a typical agricultural country with most of the population engaged in farming.

In the paddy field rice cultivation agriculture, for the work of concentrated rice transplanting and rice reaping in the fixed time, etc., group and cooperation order were required the neighborhood fellow force in order to do in addition, the cooperation work.

Allocation of the water pulled in the rice pad was also necessary order of the allocation of the neighborhood fellow. However, they are particularly worrisome for rice-farmers, as it is in the rainy season that the rice plant blooms and ripens.

Yamato River flooded by the flood in which the degree piled up, and large stroke was given to the rice-farmers. Then, the plan to prevent damage by a flood by putting and substituting a Yamato river was made.

The Kawachi cotton was replaced with the Inada peach by the replacement of Yamato River. It is that it becomes the aid of the low carbon society construction by trying the maintenance of the species of the Inada peach and the Kawachi cotton, sure.

* 大阪経済法科大学 地域総合研究所客員教授

** 稲田八幡宮氏子総代、楠根リージョンセンター初代所長

*** 大阪経済法科大学 地域総合研究所客員教授

Key words: *Kawachi no kuni, Rice cultivation agriculture, Inada peach, Low carbon society construction* [大阪経済法科大学地域総合研究所紀要創刊号] [Regional Research Institute(RRI), Osaka University of Economics and Law Vol.1 (2009), 35-45 pp]

はじめに

日本は19世紀中頃まで典型的な農業国であり、国民の大多数が農民であった。

水田稲作農業では、雨期の頃は丁度稲の開花から結実期にあたるが、さらに大阪平野では洪水に悩まされていた。宝永元年（1704）大和川の付け替えによって、稲田村の一部は陸地化し、新田では綿の栽培が広がった。しかし、戦後の高度経済成長の進展とともに、二次産業、三次産業の向上が目覚しく、農業は若者にとって魅力を失うこととなった。近年、環境問題が浮上するなか、稲田は古くから稲田桃の産地として知られ、全国にその名を惜しまれ、近世の盛大を偲ぶ唯一の歴史的誇りである。地域住民の感懐は今なお大きく稲田桃の保全など持続可能な環境型社会を目指して邁進している。今回、我々は江戸時代から現在の河内国・稲田の歴史的、地理的背景について考察した。

1. 河内国

河内国は、畿内の一国。現在の大阪府の一部である。

淀川の左岸と生駒山地との間に形成された国で、河内国略図¹⁾にあるように周囲を山城・大和・紀伊・和泉・摂津の五ヶ国に囲まれ、北境にあたる山城川（淀川）の「川の内の方」という意味により河内の国名が生まれたといわれている。¹⁾また、泉森²⁾は、淀川を北限とした河の内側（南）にある地域の意味として生まれたとの意見もある。と記している。いずれにおいても生駒山脈の西麓の地域を占め、聚落は南北に延びる山麓線に沿って形成されている。

國史大辞典¹⁾によると、郡名の初見は「続日本紀」神護景雲2年（768）2月条である。

国内においては、称徳天皇の神護景雲3年(769)9月、由義宮（ゆげのみや）を造り平城京に対して西京と称し、国司を廃して河内職（かわちしき：臨時の令外官制）を置くも宝亀元年(770)8月26日天皇の崩御により元の河内国に復した。

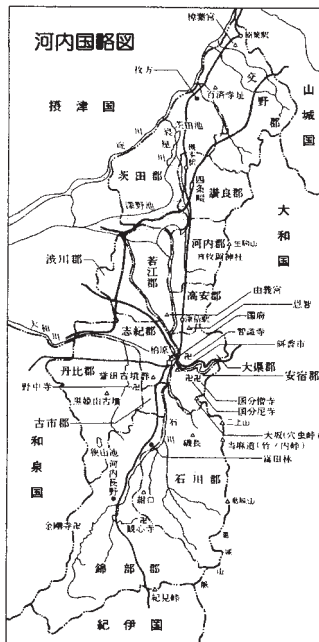


図1) 國史大辞典 第3巻 p.179

Fig 1 The Kawachi country skeleton diagram.

The Kawachi country has been divided into 14 counties according to ancient “Engishiki”. Engishiki was enforced in the enforcement regulation of Ritsurei in 927.

古代、「延喜式」によると河内国は大国で、所管は錦部郡、石川郡、古市郡、安宿郡、大県郡、高安郡、河内郡、讃良郡、茨田郡、交野郡、若江郡、渋川郡、志紀郡、丹比郡の14郡となっている。

丹比郡は、平安時代中期以降に南北2郡に、さらに中世の末頃にこの2郡からさらに八上郡が分かれ、丹南・丹北・八上の3郡となり河内国は16郡となった。以後郡数に変化なく明治維新に及ぶ。

2. 若江郡 稲田村

日本輿地通志³⁾畿内部分第三十八、河内國之十二、郷名に若江郡が記され、村里には稲田の名をみることができる^{図2)}。また、若江郡・稲田村は、稲田、楠根そして菱屋中新田の一部となっている。

明治22年(1889)町村制によって、長田、西堤、川俣、稲田、橋本の5つの村落を統合して楠根村と称した。

現在の稲田地域は、旧稲田村の稲田上町・新町・本町、稲田三島町、七軒家、楠根の範囲である。

明治29年(1896)旧河内国内の16郡は北、中、南河内郡の3郡に編成され、丹北・若江・高安・大県・渋川の諸郡及び志紀郡三木本村と合併して中河内郡となる。

中河内郡誌⁴⁾楠根村大字稲田の項に、慶長年中より豊臣氏之を領し元和(1615~1624)年中より徳川氏の代官支配所となり、文久3年(1863)より稲葉長門守等各代りて所領せしが元治元年に松平越前守之を治むるや明治維新に会せり、とある。稲田には稲田八幡宮はじめ観音寺、正行寺、存空寺が現存する。

中河内郡誌には観音寺は、曹洞宗に属し正観音を本尊とす。もと字観音田に在りたる巨利なりしが兵火に罹りて・・・とある。戦国時代の戦乱で消失した観音寺は、上方代官の鈴木三郎九郎重成公(当時、摂津・河内の堤奉行兼任。後に初代天草代官となる。)を施主に慶安元年(1648)に戦乱の折に運び出し地中に埋めておいたと言われる聖徳太子御作の聖観世音菩薩(観



図2) 輿地通志 第38巻 p.224

Fig 2 Kochithushi vol.38 224pp
Name of places of the Wakae county Inada has been described in the Kochithushi.

音様)をご本尊としてこの地に再興された。寛文6年(1666)創建の本堂正面の観音さまの前に徳川大將軍三代(家康公・秀忠公・家光公)の位牌が安置されている。

稲田八幡宮は徳川時代に記録されたという稲田村由来記⁵⁾によると足利時代(室町前期)稲田村根元は大和川北辺ー稲田領分ー北東に当たる後に字屋敷割と称する処ありー観音樋の西側に人家18軒住す。氏神を河内国誉田より迎へ元古市郡誉田八幡宮御移し迎へ稲田村社に奉申し、とあり、誉田八幡宮を勧請して氏神とし、仲哀天皇、神功宮皇后、応神天皇の三神を祭神としている。また、石の鳥居に刻まれた寛永元年(1624)^{写真1)}が古き時代を物語っている。今のお伊勢さんは観音寺境内に祀られていたもので、明治元年(1914)の神仏分離令いわゆる廃仏毀釈によって稲田八幡宮に移され祀られている^{写真2)}。



写真1) 稲田八幡宮 鳥居

Photo 1. The guard frame in the stone of the Inada Hachimangu shrine. (It is carved with the Kanei gannen (1624).)



写真2) お伊勢さん 稲田八幡宮境内

Photo 2. Ise Jingu which has been deified in the Inada Hachimangu shrine precincts.

平成20年(2008)9月神仏分離政策によって別々の道を行ってきた近畿各地の神社と寺院150社寺が伊勢神宮とを結ぶ神仏霊場巡拝の道がつくられた(会長・森本公誠 東大寺長老)^{図3)}。



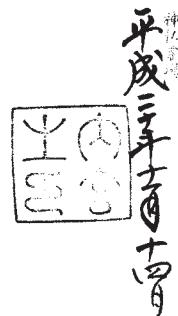
図3) 東大寺御朱印

Fig 3 Todaiji Temple Goshuin



伊勢神宮御朱印

Ise Jingu Shrine Goshuin



Goshuin is a proof of having visited.

昭和30年（1955）1月15日、大阪府中河内郡の盾津町・玉川町・英田村・若江村・三野郷村の五ヵ町村が合併して、市制を施行して河内市と称した。

昭和42年（1967）2月1日、隣接する布施市・枚岡市と合併して廃市、東大阪市の一部となる。

現在では、旧河内国の範囲は、大阪市の一部、堺市の一部および枚方・寝屋川・交野・守口・門真・四条畷・大東・東大阪・八尾・松原・柏原・羽曳野・富田林・河内長野・藤井寺の各市と南河内郡を含む地域となっている。

3. 地形的には、

縄文時代の約5000年前までさかのぼると、今の大阪平野のある場所は、河内湾という海が広がり、北から淀川、南から大和川が流れ込み、地域の大部分は淀川および大和川の沖積地である。弥生時代の約2000年前には、南部の南河内・羽曳野丘陵から北方に角状に突出した上町台地の半島地形と、その東側を挟むように入り組んだ河内湾で形づくられていた。河内湾は大阪湾とほぼ分離して河内湖となった^{図4)}。

しだいに湖は縮まったが江戸時代前期にはなお河内平野中央部には深野池、新開池という2つの池が残っていた。

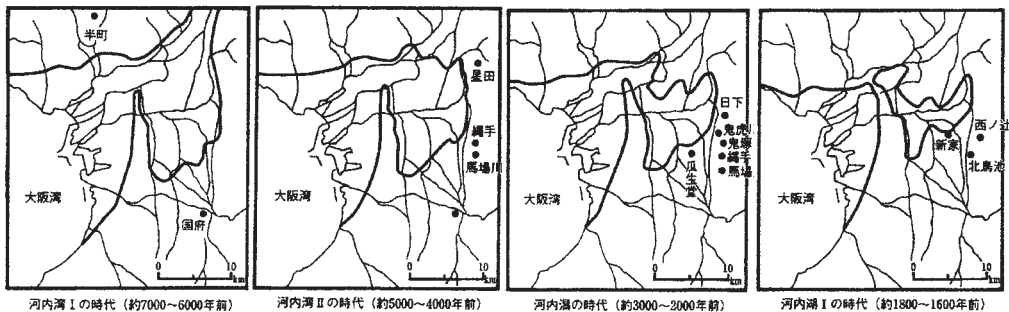


図4）泉森皎：河内の古道と古墳を学ぶ人のために、世界思想社、2006. p6 第1図

Fig 4 The aspect of Osaka Plain about 7000～1600 ago.(The transition figure)

その後も土砂の堆積が進み、南から流れる石川と、東から流れ柏原市国分で合流する大和川^{写真3)}で扇状地を形づくっていた。

旧市域はかって北半に新開地をいまだく低湿地であったが、中甚兵衛（河内国河内郡今米村庄屋九兵衛の三男）は父の遺志を継いで幕府に再三嘆願し、元禄16年（1703）4月これが認められ翌宝永元年（1704）10月大和川の付け替えが完工したことによって、最後まで残った深野池、新開池が干拓されて陸地化し、鴻池新田などが開拓された。

柏原市新大和橋^{写真4)}を起点とする長瀬川は東大阪市森河内西で第二寝屋川に合流する^{写真5)}。柏原市安堂交差点には中甚兵衛（なか じんべえ）の像がある^{写真6)}。



写真 3) 石川(正面)、大和川合流点(大和川右岸より)

Photo 3. The confluence (from the Yamatogawa River right bank) in Ishikawa (front face) and Yamatogawa River.



写真 4) 長瀬川起点

Photo 4. The Nagasegawa River origin.



写真 5) 第 2 寝屋川との合流点(放出駅南公園より)

Photo 5. The confluence in Nagasegawa River and second Neyagawa (from the Hanaten station south park).



写真 6) 中甚兵衛像

Photo 6. The Jinbee Naka statue which made efforts at the Yamatogawa River replacement work. (The replacement work completion in Eihou gannen ((1704)October.)

こうした地形を利用したの灌漑施設の整備によって、この地方の開拓は早くから進められる状態にあった。

また、西に瀬戸内海を控えるという水上交通面での利点もあって、大和朝廷は全国支配や半島進出の有力な根拠地とみなし、そのためこの地への進出は積極的で、屯倉の設置などを活発に進めた。この点を裏付けるものとして、誉田古墳群は、応神陵・白鳥陵などの巨大な前方後円墳を含む古墳群として注目されるが、近年その存在が大きく捉えられるに至った古市大溝や、昭和53年(1978) 4月に出土した修羅^{写真7)}(化学的保存処理され、文化遺産として大阪府・河南町の「近つ飛鳥博物館」で展示されている。)は、その存在また出土地点から上述の古墳の造営と密接な関係を持つとの見解が出されている。



写真7) 修羅 レプリカ(道明寺天満宮にて、1978.8.22)

Photo 7. Shura (The replica was set up in Domyoji Tenman-gu Shrine in 1778.)
Shura: Transportation ingredient in ancient times.

特に、大和と攝津あるいは山城と摂津を結ぶ交通路の一つとして重要な役割を持つ地域であったため交通の要衝となっていた。

聚落は主として生駒山地の西麓に沿う地域と、大和川および葛城山脈から発する石川の川岸に発達した。土地が比較的豊饒であったことから、農業の発達は和泉・讃岐・大和ともに上位にあり、米・麦・蔬菜・果物などの産も多く、旧楠根村稲田においては桃がつくられていたことが輿地通志³⁾、中河内郡誌⁴⁾、河内名所図会⁶⁾、図5)に記されている。

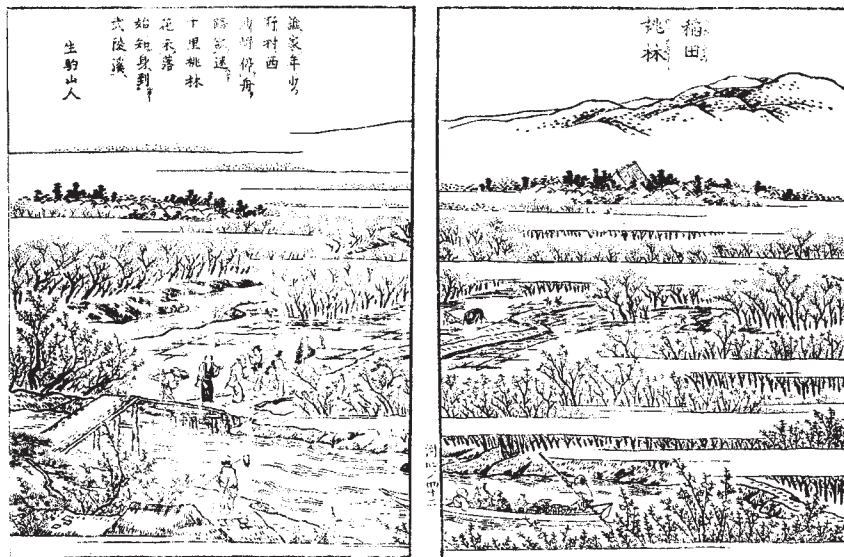


図5) 河内名所図会 卷4の42

Fig 5 The river descent of Kusunegawa (the Edo era) seeing peach forest.

特に、中河内郡誌⁴⁾、図6)には、往昔此地は桃の名産地なりければ花の盛りには、楠根川に船を浮かべて花見の宴を張り、桃花を愛せしが今はただ数株の桃樹を川畔に残せるのみ。(中略) 此地の特産なりければ地名を冠らせて稲田桃と名づけたり」とあり、美味であったことを伺い



諸家年少村西沙岸停舟踏欲迷十里桃花未落始知身到武陵溪
生駒山人

桃 田 稻
(村 田 稻)

図6) 中河内郡誌⁴⁾ p502

Fig 6 The aspect of Kusune-gawa River in the Taisho's 12 ages. (At this time, the tree of the peach also decreases.)



写真8) 法音院(京都市東山区泉涌寺内町)

Photo 8. The peach observed in the eaves roof tile of the temple. (Eaves roof tile of Houonin in Kyoto City)



写真9) 楠根川緑地

Photo 9. It becomes a field of the relaxation of the regional inhabitant as a Kusunegawa River green land at present.



知ることができる。また、桃は邪気を祓うということで寺院の軒瓦にも見ることができる(写真8)。

中河内新郷土誌⁷⁾には古来当地は稲田桃の名によって、知られていた土地であったが、今は楠根川畔に数株ある位であると記されており、昭和のはじめ頃は衰退の一途を辿っていた。

現在の楠根川は楠根川緑地として地域住民の憩いの場であるとともに(写真9)稲田桃は、緑地あるいは遊歩道沿いに移植され保全活動が行われている(写真10)。

稲田の一部の地域は菱屋東とともに菱屋中新田村にあり、大和川の付け替えによって、陸地化し、鴻池新田などとともに開拓されたが、新田がすぐに豊かな実りをもたらすことは無く、旧河床の新田は、純然たる砂畑であったため、砂地で水はけのよい地を好む綿の栽培が広がり、江戸時代から明治前期までは主として綿が栽培された。

河内では水田と綿畑を交互に作る島畑^{図7)}が広がり、特に天文年間(1532~55)に三河にもたされたといわれる河内木綿の集荷地域として著名であった。



写真10) 稲田桃の保全活動

Photo 10. The aspect of maintenance activity of Inada peach.

大阪経済法科大学では、地域連携事業・環境保全の一環として河内木綿の保全活動に取り組んでいる。(http://www.keiho-u.ac.jp/research/contribution/work.html)

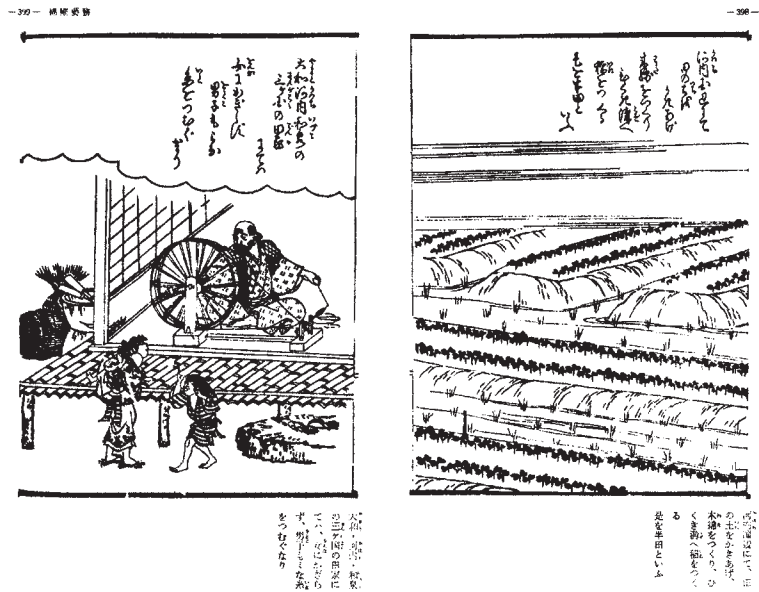


図7) 日本農書全集 第15巻 398-399頁 1977 農山漁村文化協会 東京

Fig 7 The aspect in those days (Tenmon Era 1532~55) of island plowed field which paddy field and cotton field alternately make and cotton is shut.

4. 戦後における稲田の発展と住民活動

4.-1 稲田の人口

明治26年(1893) 浪速鉄道片町線が開通した。徳庵駅が設置されたことで、稲田と大阪のつながりが深まり、市街化が進んだ。昭和2年(1927)の稲田以外の村も含む旧楠根村の人口は5,180人⁸⁾であったが、昭和16年(1941) 近畿車輛⁹⁾徳庵工場の操業、昭和25年(1950) 9月サンヨー¹⁰⁾住道工場等の新設によって、徳庵駅周辺に従業員寮の建設とともに住宅地や商業地も形成され、人口国勢調査による昭和25年(1950)の稲田の人口は6,532人となっている。その後、高度経済成長とともに昭和50年(1975)には19,138人と急激に増加するも昭和60年(1985)には17,730人、平成20年(2008)には17,406人となり、減少傾向にある。

4.-2 稲田の現況

東大阪市は、平成11年(1999)「新基本計画」によって、地域市民施設に対する需要の高度化、多様化などの日常生活圏の拡大傾向を勘案して成人の徒歩30分圏内程度を目安に区域が設定されたことによって、楠根リージョンセンターが開設され、文化活動の拠点となった。さらに、平成15年(2003)「総合計画」によって、人・モノ・情報が集まる都市拠点として、整備促進の方向性が示された。平成20年(2008) 3月 JR おおさか東線(放出～久宝寺)が開業した。平成23年(2011)年度末には、放出から新大阪へ延伸される予定である。その他、江戸時代(宝暦4年)から引き継がれてきた墓総代制が、平成8年(1996) 3月に廃止され、新たに墓地管理委員会が組織され会則及び墓域使用規約が定められた。また、JR 片町線(愛称:学研都市線)徳庵駅エレベーター設置の請願運動が行われている。

まとめ

近年、河内平野は大阪の東部工業地帯の延長的性格を示し、農村手工業も消滅の段階にあり、生駒山麓一体や旧大和川河床の住宅地化などが顕著で、かつての河内国の自然・人文景観は急速に変貌を遂げつつある。

稲田地域にあっては、計画道路の開通による近鉄バスの駅前乗り入れなど徳庵駅前の再開発の促進、環境保全活動の一環としての稲田桃の保全など持続可能な環境型社会を目指し、地域住民による地域づくりを最重要課題として取り組んでおり、今後の発展が期待される地域である。

謝 辞

論文作成にあたり校閲いただいた八尾市立歴史民俗資料館長並びに大阪経済法科大学 副学長 橋本 久 教授はじめ資料・文献等の検索で東大阪市稲田在住の元・関西学院大学 文学部非常勤講師 永松圭子氏、翻訳にご協力いただいた大阪女学院短期大学 英文科 宮本 都々奈さんに深謝します。

参 考 文 献

- 1) 國史大辞典『國史大辞典編集委員会編』第3巻 古川弘文館、昭和58年
- 2) 泉森皎『河内の古道と古墳を学ぶ人のために』世界思想社、2006年
- 3) 篠田行人、長坂一雄『大日本地誌体系・五畿内志・泉州志』第一巻、雄山閣、224頁、昭和46
- 4) 『中河内郡誌』中河内郡役所、p.501-502、大正12年
- 5) 藪康作氏所蔵『稲田村由来記』（山沢家文書）1頁 明治38年（徳川時代のものは不詳）
- 6) 稲田八幡宮所蔵『河内名所図会』巻4之42
- 7) 片岡英宗『中河内新郷土誌』p.73-74、大正14年
- 8) 『布施市史―市制10周年記念』布施市役所、p.189、p.350、p.352、1945年
- 9) 『50年の歩み』近畿車輛、1971年
- 10) 『三洋電機五十年史』三洋電機、2001年